坂根口番所跡

江戸（現在の東京）幕府が石見銀山を 17 世紀初期に直接管理するようになると、銀鉱山の周りには柵が造られ、すべての出口には番所が建てられました。これは石見銀山を出入りする人や物の流れを管理するためでした。こうした番所にいた衛兵たちは、銀山へと入る品物にかけられた税金を支払われるようにしたり、幕府の財源となる銀が密かに持ち出されないようにしたり、柵で囲まれた場所で働いたり暮らしたりすることを許可された人々のみがそこに入るようにしたりするよう確実にする任務を担っていました。中心の採掘地域の周りには 10 軒の番所がありました。また、政府が直接管理し、150 ほどの近隣の村を抱えていた銀山御料という地域一帯にはさらに多くの番所がありました。坂根口は、採掘場を出入りする物を輸送するための主要な水路である温泉津港へと向かう道のりにおける最後の番所であったため、特に重要でした。番所があった場所には最寄りの家があり、番所の跡は一切残っていませんが、温泉津への道のりはいまでもそのまま残っています。坂根口からその道のりは峠を越えて、西田の村を通り抜けていきます。歩いていくと 5 時間ほどかかる道のりとなっています。